最適解を導く力

第52回
神戸山手女子中学校高等学校
校長
平井 正朗

Profile
平井 正朗（Hirai Masaaki）
神戸山手女子中学校高等学校 校長
濱名山手学院 理事、関西国際大学客員教授、大阪市教育委員［教育長職務代理者］、全国芸術高等学校校長会 理事、国際教育学会 理事。
2021年度より同校校長に着任。学校事情に詳しく、大学では「学校経営論」他、教職科目の教鞭を執る。著書に『平井校長の英語のしくみ探究講座』（三省堂）他多数。

文部科学省の推計によると、大学への入学者数は2040年に51万人、2050年に49万人である。少子化の影響は厳しく、定員が現状のままだと2割分が埋まらなくなるとのこと。結果、選抜方法の劣化や資金不足による環境悪化は教育の質を低下させ、引いては、国際的な競争力の衰退につながることが懸念されている。当然、AI、グローバル、環境といった成長分野をキーワードにした産官学協働による教育や研究を進めることが必須。

これまでの進路指導を振り返ると、大学での専門分野がどれほど社会に役立つものになっているか十分に浸透していない状態で高校を送り出してきた感がある。しかし、これからは、大学の情報発信や受験指導に偏った進路指導の見直しも含め、意欲ある生徒のために早い段階から学びの場を提供できる中高大の接続が求められる。現任校でも「関西国際大学進学プロジェクト」をスタートさせた。

AI活用のフェーズが変容し、高度な対話能力をもつチャットGPTに代表される生成AIが登場した。これは、脳の学習メカニズムをコンピューター上で再現した深層学習（ディープラーニング）と呼ばれるもの。普及が進めば生産性が向上し、GDPが上昇するという予測がある一方、偽情報やサイバー犯罪への悪用を危惧し、規制の必要を求める声があるのもまた事実。真価が問われるのは、幅広い知的作業を担い始めるテクノロジーとどう向き合うかであるが、いつの時代も変化に対応してきたのは思考力と英知の結集である。AIから画期的なアイデアを引き出し、新たな価値を生み出すためには、それを使いこなすスキルを高め続ける努力も忘れてはならない。

AIが身近な存在になった今、これまでの暗記と再生による知識偏重主義ではなく、正解がひとつの問題はAIに任せ、リアルな社会問題を探究する「主体的・対話的で深い学び」に直結させることが現場のミッション。教育のデジタル化が進行し、子どもたちにどのような力を育むべきか、次期学習指導要領の策定に向けて、議論すべき時が来ている。チャットGPTで言えば、人と区別がつかないほど、自然な言語のやりとりができるようになっている。

しかし、限界の一つが人間のように文書を理解しているのではなく、ビッグデータから語彙の関係を捉える深層学習によって関連する文書を組み合わせ、回答を生み出しているという点。最適解が導けるかどうかは未知数なのである。

また、人間の知性が脳の中だけにあるのではなく、脳以外の身体感覚が統合して生まれるという考え方や身体性に加え、他人とのコミュニケーションの中に知性が存在するという考え方もある。

大切なのは、数ある情報の中から事実と根拠に基づき最適解を合理的に取捨選択できる力を身につけることに他ならない。これは読書を通じて、必要な知識を身につけることとかわりない。教育活動が幅広く深い教養を身につけることを目的としているのは今も昔も同じなのである。